

幸福と不安のカクテル

一九八六年六月一〇日初版発行

著者 瀬戸内晴美

発行者 大和岩雄

発行所 大和書房^{だいわ}

東京都文京区関口一―三三
郵便番号 一―一二

電話 (〇三) 四五一一
振替 / 東京六一六四二二七

装丁 鶴本正三十田形斉

印刷所 信毎書籍印刷

製本所 東京美術紙工

乱丁本・落丁本はお取替えいたします

ISBN 4-479-01027-0 C0095

瀬戸内晴美

幸福と不安のカクテル

目 次

△第一章▽煩惱の行方

旅へ 11

煩惱の行方 17

ある出逢い 21

目白台アパートの思い出 28

永遠の美女 35

バンクーバーの夏 42

木の椅子の作者 46

不良 51

ふたたび捨ててこそ 54

△第二章▽幸福と不安のカクテル

幸福と不安のカクテル 61

「うらむらさき」について 64

ロマンティック・エイジ 68

見えてきたもの 71

白秋の妻たち 75

彼岸からの声 79

白秋とらいてう 84

二人の天才 91

供養 98

私と辻潤 101

「私小説」のあと 104

作家の年齢 109

△第三章▽「底に到って始めて休^やむ」

「底に到って始めて休む」 117

さるすべり 123

恋に命を賭けた人 143

いっそう命を大切に 153

ある法廷 158

△第四章▽顔から顔へ

源氏物語の女たちの出離 173

「にぎりえ」を読む 188

仏教への熱い視線 190

デュラス、愛と孤独 207

顔から顔へ 211

写真Ⅱ吉村則人

布Ⅱ柳清子コレクション「パトラ」

幸福と不安のカクテル

第一章 煩惱の行方

旅へ

昔、私は大道易者に見てもらうのが好きで、数えきれない町の易者の前に立った。たいてい夜で、彼等は頼りない灯の下で、生活苦の滲んだ陰気な表情をことさらしかつめらしくさせ、私の顔をちらりと見ては、掌をひろげさせた。

みんな大同小異のことをいって、はじめから本気でない私は、聞いた片端から忘れてしまうのが常だったが、一度だけ、池袋のビルの前に店出ししていた年よりの易者にいわれたことばが心に残った。

「あんたは放浪の星の下に生れていて、絶対一所に落着けない。生涯旅から旅へさまよう運命だ」

まだ、小説家として何の芽も出ていない時だったので、如何にも放浪の星というのが自分にふさわしく思われて、私は冗談半分の浮わついた声でいった。

「それでつまり、流浪の旅路の果に野たれ死するわけね」

易者は、私の顔に大きな天眼鏡をあて、じっと目を据えてから、物哀しそうに首を縦に振った。なぜか見料はいらないという易者に、私はけんか腰で見料を置き、その場を離れた。その晩、ひとりであったか、誰かといっしょだったかも覚えていない。冬の星が、冷たくビル谷間の空にまたたいていたことと、易者の汚れたような灰色の顎鬚のやつれた顔ただけが、今でもありありと記憶に残っている。

それから二年ほどして、私は文学賞をもらい、小説家としての一步を踏みだすことが出来た。気がついたら、私は牢獄の囚人のように、部屋にとじこもりきって、朝から晩まで物を書きつづける生活に追われていた。

そして二年めごとに転々と住居を移し、引越しばかり性こりもなく繰りかえしていた。

なぜか私の引越しはたいいてい年の瀬も押しつまった頃に決行される。荷物を出すのが夕方までかかり、自分は今までいた部屋の後始末をして、新しい住居に向う時は、ほとんど夜になっていた。

大晦日に近い師走の空は高く、星が寒そうにまたたいている。その星の震えるような心細いまたたきを見上げる度、私は奇妙な正確さで、いつかの池袋の老易者の顔と、陰気な声を思い出すのであった。

放浪の星……一所に落着けない……

私の引越しは、単に住居を移すというだけの意味でなく、必ずといっていいほど、それまでの生活の破壊作用を伴っていた。破壊は、平穏な落着きのある暮し向きに対してであり、自然にな

じみきった人との別れを道づれにしていた。

賽の河原で子供が積む石は、いつでも鬼がやってきて、つき崩してしまふ。私の中には、あの賽の河原の鬼のようないきものが一匹棲んでいるのかもしれない。

ひとつずつ、ひとつずつ、律儀に石を積みあげる自分と、それを突き崩さずにはいられない自分と、どちらが、私の本質なのか、今でも私にはわからない。

ただ確かにいえることは、引越しの途中の、古い生活から、新しい生活へ移っていく道中の、さびさびとしたすがすがしさが、どんなに愛に恵まれているあたかなつかしい時間よりも、心が落着けるということだけだ。

繰りかえし引越し、繰りかえし人との別れをつみ重ねた歲月の果に、私は出離しゅつりして、現在の生活に入った。

それまでにも、私は、忙しい暮しの中を、実によく旅に出た。仕事がらみの旅が多かったが、旅をふくんだ仕事に、私が格別乗り気になるという癖が招いた旅ともいえよう。

それだけ仕事をしている忙しい中によく旅に出られますねと、人に呆れられるが、恋とか旅とかは、忙しさとは無関係に出来るものだと思う。むしろ、忙しくて時間がない時に、それはかえって情熱をそそられるもののように私には思われるのだ。

出離して以来、私は珍しく、全くこれまでに例のない長さで一所に住居を据えている。従って人との別れもなければ、生活の破壊もないかに見える。

しかし果してそうだろうか。私の内なる鬼は、もう私の出離と同時に私の内に居なくなつてし

まったのだろうか。

出離して尼僧になっても尚、私は実によく旅に出ている。嵯峨の庵の周囲は年毎に家が建てこみ、昔の嵯峨野の面目はすっかり失われてきつつあるといっても、尚まだ、日本では指折りの閑静な美しい土地とっていいだろう。その還境の中にいながら、私は何を好んで旅に出たがるのであろうか。

しかも、私は自分の閑寂な庵の書齋よりも、旅の途上の見知らぬホテルや旅館の、なじみのない机の上で仕事をする時の方が、ずっと精神が集中し、一心不乱になれるというのだから、我ながら呆れてしまう。

ボタンひとつ押せば、私の好みのお茶や、ほしい果物や、お菓子がすぐ運ばれてくるわが家ではなく、まずいお茶や、好みでない食物に失望しながら、趣味の悪い机や、せまくて使い難い備えつけの机などで、仕事をする自分を、私の内のもうひとりの私が見て、小気味よきそうに笑っている。笑っているものは、あの石を突き崩す鬼であろう。

引越しをしないかわりに、私は以前にもまして、無闇と旅に出かけている。

京都駅の赤帽は、私が旅に出かけるのを見馴れていて、すっかりなじみになっているが、それでも時には、

「ほんまによく旅に出やはるなあ、家にいてはるより、旅にいてる時の方が多いんとちゃいますか」

ということがある。

そしてかねて憧れていた巡礼を、今年（一九八〇）こそ果そうと思い、私は今年の正月から、仕事をほとんどしなくなった。少くとも一年は、この状態をつづけようと実行し、半年は思い通りに出来た。

巡礼にも行きはじめた。正月のスリランカを皮きりに、西国も四国もはじめている。

そしてまた、突然、この夏は、敦煌^{とんこう}とチベットの旅への参加が決った。

この原稿は、東京のホテルの机の上で書いている。出発は明日の午前七時だというのに、まだ荷物の整理が出来ていない。

敦煌のグループが八月三日から十八日までで、チベットのグループは八月二十四日から九月四日までなので、その間、出入りが面倒だと思っていたら、上海で中国作家協会が受け入れてくれることになり、ひとり、上海に残り、チベット行きのグループにドッキングする様取りはからってもらえることになった。そのため、まるまる一ヶ月、中国で暮すことになった。

解放後の中国へは、今度で四度めである。何度行っても広い国だから、象を撫でるようなもので、実体を掴んだ気は、一向にしない。

敦煌には四十年間憧れていたもので、行ける今となってもまだ夢のような気がする。

チベットもまた、敦煌について、見ぬ恋をしていた所なので、もうすぐその土を踏めるといふことが、まだ信じられないほど夢心地である。

砂漠の熱風も、チベットの高山病も、私には一向に怖くはない。旅の苦痛は、愉しみのひとつで、苦勞のない旅など実につまらない。私が一番つまらなかったのはアメリカとハワイの旅で、